

「君を見てるとね、

なんか、エッチな事をしてあげたくなるんだよね…」

「おねえさん×ショタ」シリーズ

# むちむちティ〇アさんと金髪ショタくん



今日も私はこのコとエッチな事をする。

大の人がこんな事をするのは間違っているとは思うけれど、大好きな人の幼い頃に似ているこのコを前にして理性なんて保てない。

『ねえ？お姉ちゃんがこんなにご奉仕してあげてるのに今日はまだ大きくならないの？』

『ごめんなさい。あ、あんまり強く握らないで。。。』

『あつ。。。』

『え？いつも通り優しくにぎにぎしてるだけよ？君が敏感なだけ♪』

「あつ♪ やつと大きくなつてきた♪」

「あううう。。。お姉ちゃんのヨダレが僕の口にいっぱい入つてきて苦しい。。。」

はま

れらじ

れらじ

シュー シュー

『そんな事言つてもやめてあげない♪ 今日もたくさんベロチュウしながらエッチな事たくさんするの♪』

はま

「あつ。。。」

「あ♪ やつと我慢汁出できたり♪ あといつもみたいに鼻息も荒くなってきた♪  
うふふ♪ そろそろ白いのピュツピュツする?』

『え、あれまた出るの? や、やだ・・・あれ出る時、僕おかしくなるんだもん・・・』

『だーめ♪ 今日もいっぱいピュツピュツするの♪

それに前、白いのが出るのは男のコだからしようがないって教えたよね?  
なにも怖くないんだよ?』

このコに初射精させたのは私。あの時の底知れない優越感、征服感ときたら、何ものにも変え難い体験だった。  
はあ、今思い出してもゾクゾクする♪

「あーー出ちゃう。。。」



このコはいつも射精する時、目を瞑りその細い体を小刻みに震わせながら、  
私はそのかわいい顔を見る度、もつともつとエッチな事をしてあげたくなる♪  
私に申し訳なそうな顔をする。

少し休憩した後、今度は口でたっぷりしゃぶってあげる♪  
フェラをしはじめた頃は

「そんな汚いところ舐めちゃだめだよっ！」

と顔を真っ赤にして怒っていたけれど、今はこの通り。  
オチン○ンの先っぽが気持ちいいらしいので、

飴玉を舐めるように、口中で転がしながらしゃぶってあげる♪

「先っぽだけチロチロ気持ちいい？」

「うふふ♪ 君って本当にかわいいね♪」



「あああっ！ お姉ちゃんの喉に当たつてる。。。」

いちいち反応がかわいい♪  
たまに根元まで咥えこんであげる。  
あまり激しく口を動かすとすぐに射精してしまって、いい具合にしゃぶつてあげる。

「うふふ。  
くひのなはへ、ひみのほひんひん、ひふひふひへふほ♪  
『回の中で、君のおちん○んビクビクしてるよ♪』」

「へうう……で、出ちやう。」

「うふふ♪ お姉ちゃんの口にたくさん出していいんだよ♪

君の精液全部飲んであげる♪

「へ、ごめんなさい。」

「あやまらなくでいいんだよ？ 君の精液おいしいもん♪」

この日はあれで終わらそうと思つていたけれど、私の性的衝動に歯止めが効かなくなつていて。

少し休憩させ、本日三度目のショタチ〇ぽいじり♪

『お姉ちゃん、今日はもつと君の精液飲みたい♪ 吞みたいなおいしいのたくさん出して♪』

『お、お姉ちゃん、今日はなんかおかしいよ。。。』

『そんな事言つたって無駄♪ 君の顔にもつと僕のおちん〇ん弄つてほしいって書いてあるよ♪』

『そ、そんなこと。。。』

さすがに三回目となると、私がエッチな顔でおちん〇んを握つただけでギンギンに勃起させていた。  
嫌がつてる素振りを一応見せるけれど、その表情はどこか嬉しそうだつた。

「や、そんなに激しくしちゃ。。。」

『だつて全然白いの出でこないんだもん。はやくお姉ちゃんの口にたくさん白いの出して♪』

『はよ  
ニク  
ニク  
はよ』



「ううう。。。出ちゃうー。」

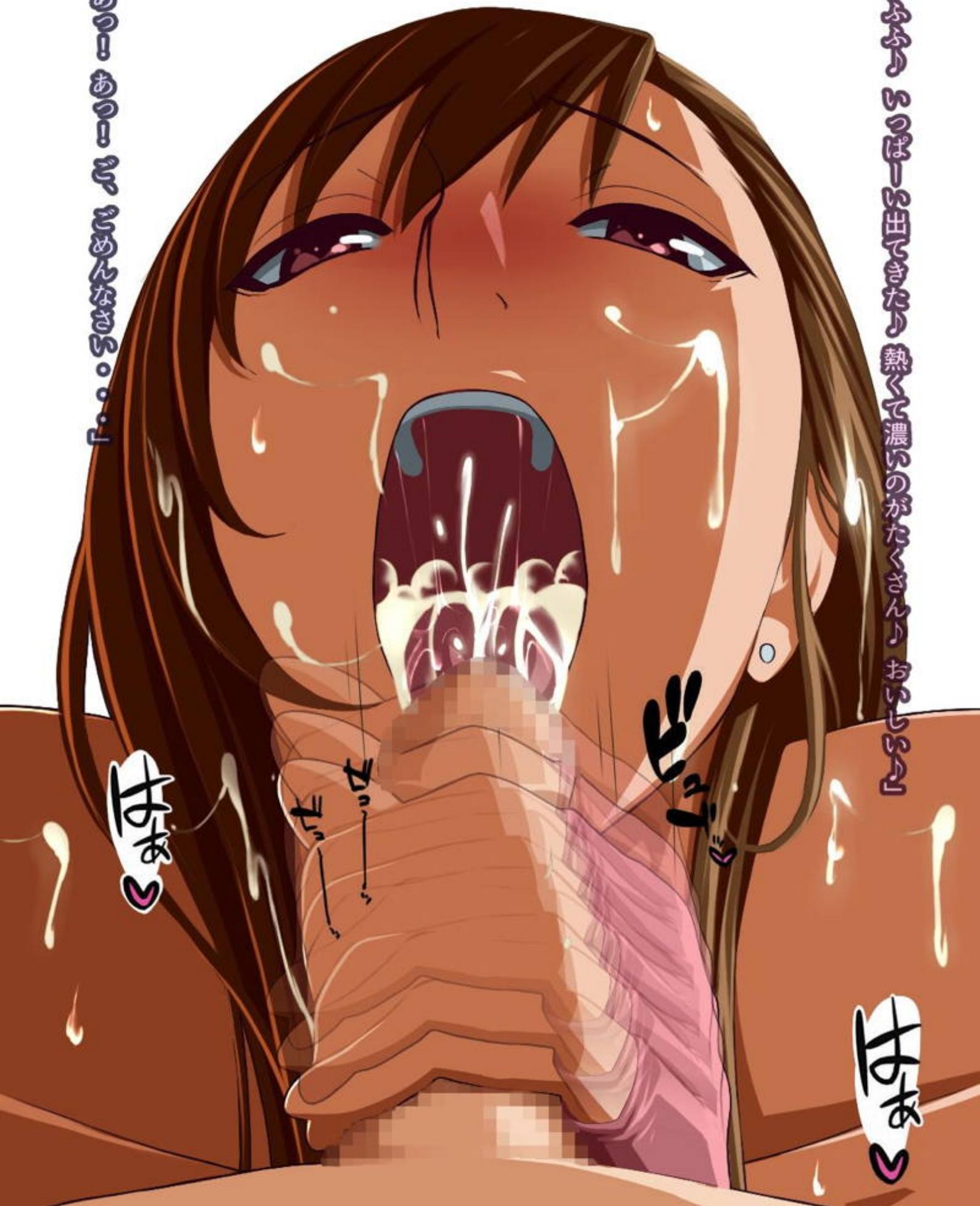
「あー、ああーーー！」

「あー、やつと白いの出てきた♪ でもお姉ちゃんのエツチな顔を見てたらもつと出るはず♪  
ほらほら♪ まだまだ出るでしょ？」



「うふふふ、うつぱー出できたか、熱くて濃いのがたくさんか、おいじらー」

「あーー、あーー、ハハ、いめんなさー。」



「うふふ♪見て見て♪お姉ちゃんの口の中が君の濃くて熱いザーメンでいっぱい♪  
ザーンぶ飲んであげるからね♪」

「お姉ちゃん、口の中だけじゃなくて。。。体中に白いのが・・・ごめんなさい・・・」

「あやまらなくていいんだよ♪よく頑張ったね♪えらいえらい♪」

はよ  
♡

はよ  
♡

山口  
タク

私が精液まみれになつた姿を見て興奮したのか、射精したばかりのおちん○んがまた勃起を始めていた。

この日は前戯じや我慢できなかつたので本番をした♪

正直、このコのショタチ○ボじやあ物足りない感はあるけれど、私の脛はこのコのチ○ボの形が好きみたい♪

入ってきた瞬間、意識しなくても

毎回勝手に締めつけを始めるんだもの♪

「あつ。。お姉ちゃん、あつ！」



「うふふ♪ 私のおちマ〇コ、今日はすうい締めつけでしょ？」

『最近ずっと無沙汰だったから、君のおチ○ボ欲しくて堪らなかつたみたい♪』

「あんつ♪ 当たってる♪」

「お、お姉ちゃん!  
いや、このままだと僕もう出ちゃう!」

まわる  
まわる

「うふふ♪ 今日は中に出して大丈夫だよ♪」

「君との赤ちゃんたつたら、私欲しいかも♪」

「え! ? だ、だつてお姉ちゃんの中に出来たら...  
あ、赤ちゃんができるからうんでしょうね?」

いつもは射精寸前で外に出させるんだけど、  
今日は久しぶりにこのコとエッチができるからハメを外してしまった。

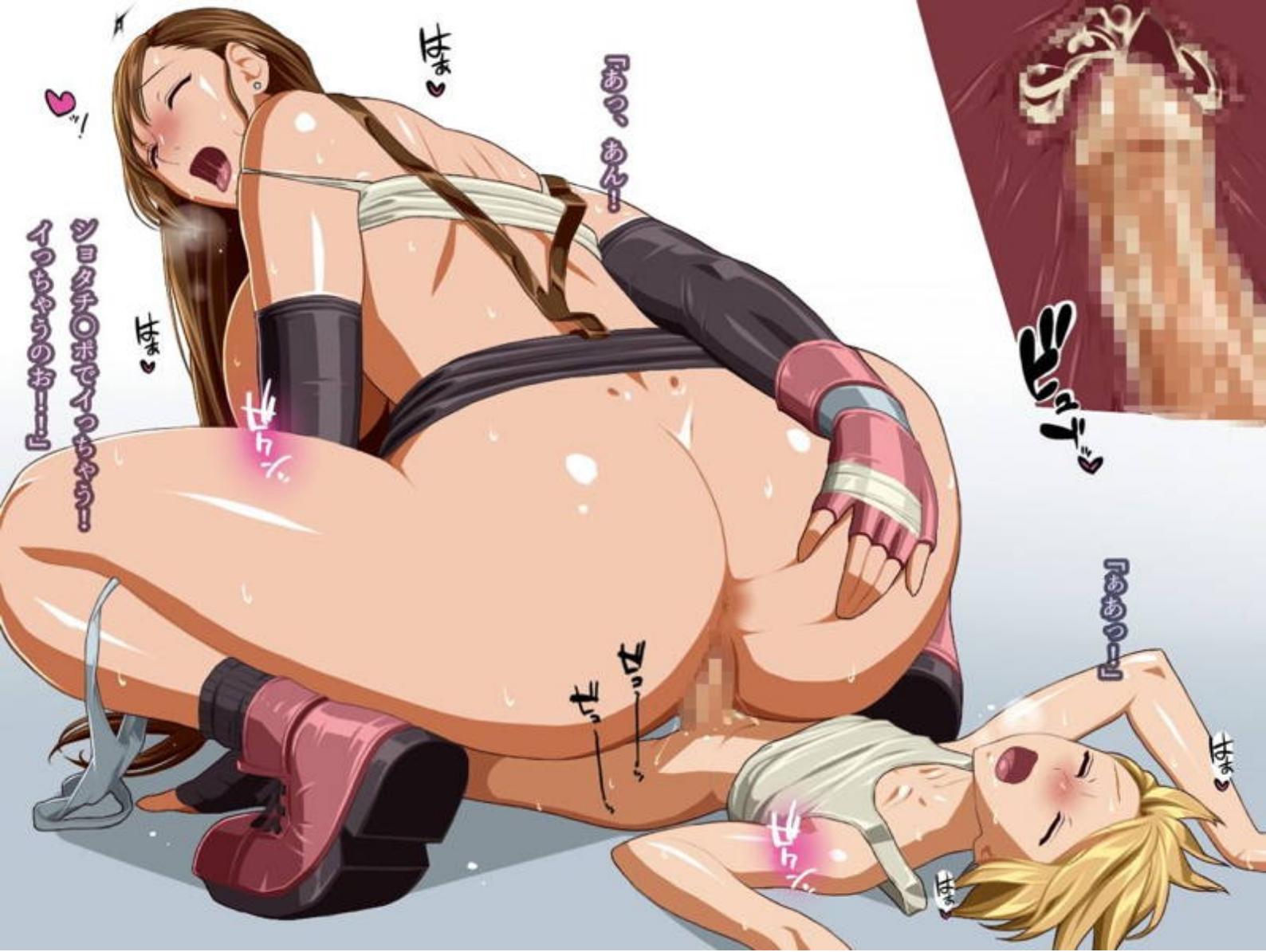
「き、君のおチ○ボ、きもちいい。。。あー、んっー」

七

「はあはあ、そんなに激しくしなや  
お、お姉ちゃんの中に出来ちゃう。。。

私がエツチな声を出す度に、  
このコのおチ○ボが少しずつ  
大きくなっていくのを感じる♪

【出す時はお姉ちゃんと一緒にいこうね♪】

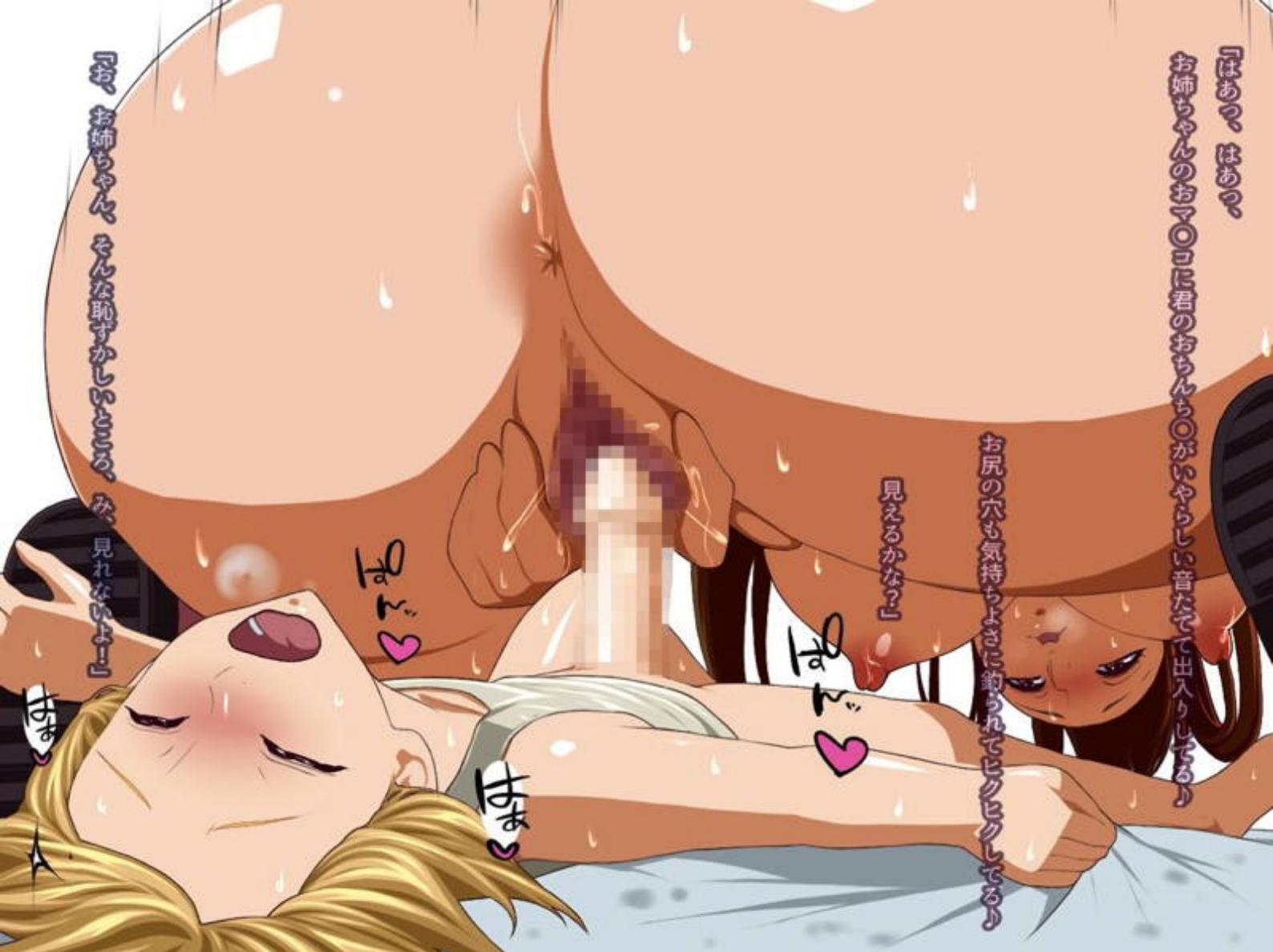


『はあ、はあ、

お姉ちゃんのおマ○コに君のおちんち○がいやらしい音たてて出入りしてる♪

お尻の穴も気持ちよさに釣られてヒクヒクしてる♪

見えるかな?』



『若

お姉ちゃん、そんな恥ずかしいところ、み

見れないよ!』

『あ

ま

はま

「見てくれないなら激しくしゃやおつと♪」

「あ、ダメ僕、また出ちゃう！  
僕、おかしくなっちゃう！」

「そんな事言つたって見てくれるまでやめてあげない♪」

「あんつ！ あんつー！」

君のおちんち○奥まで当たつてすごくきもちいわ～♪

「ああっ！ また出ちゃう！」

あつ！ あんつ！

「お姉ちゃんの大きなお尻にたくさん出して」



このコのかわいい顔を見ながら気持ちよくなりたい私は体位を変えた。

「ねえ？ 見える？

お姉ちゃんのおマ○コに君のおちんち○がいやらしい音たてて出入りしてる」

「あつ、んっ！ お姉ちゃんの締め付けすごい…」

「あ、はっき、君のおちん○んの先っぽがお姉ちゃんの子宮の入り口に当たってる♪ 分かる？」

『。。。うん。先っぽがお姉ちゃんの。。。 すごい柔らかいところに当たってる。。。』

「うかぶり  
お姉ちゃんの赤ちゃんの部屋を  
君のおちんち○の先っぽがノックしてるんだよ？」

あ、あんっ！また先っぽが当たつた♪ 気持ちいい♪』

「はあっ！ あっ！ 君のおちんち○気持ちいい！ 気持ちいいよお！」

「お、お姉ちゃんの締め付けますわ。。。  
僕もイきそう。。。」

「イク時は一緒に顔見ながらイこうね♪」

「うん。。。ああっー」



この前のセックスが気持ちよかつたのか、

今日はこのコから呼び出され、このコの家でエッチな事をたくさんする♪

「今日はいつもよりおちん○んギンギンだね♪

あつ、うふふ♪今、赤ちゃんの部屋に当たった♪」

はま

「。。。お姉ちゃん、今日は。。。なんだか。。。  
そ、そのエッチな匂いがする。。。」

はま

「うふふ♪朝、トレーニングしてきたから♪  
その時搔いた汗の匂いかな？」

。。。。あつ、あんつ！ また当たった♪」

はま

私の体の匂い、汗の中に混じっている発情した男の子にしか分からない  
とってもエッチなフェロモンの匂いを嗅いで、

このコのおちんち○がいつも以上に大きくギンギンになっている♪

「気持ちいいな」

アホ

アホ  
アホ

「うん。。。お姉ちゃんの中暖かくて気持ちいい。。。

アホ

アホ

アホ

「うふふ♪ 君のおちんち○、私のおマ○コの中で脈打ってる♪  
あ、あん！」

「うふふ♪ 君の好きなようにしていいんだよ♪」

『。。。。うん したる。。。。』

「うふふ♪ お姉ちゃんの体 好き?  
この体にいっぱいえっちなことしなり♪」

「うふふ♪ ちょっととくすぐつたいかも♪。。。あつーんつー」

「お姉ちゃんのおっぱ。。。。先っぽが柔らかくておやじゅ。。。。」

「お姉ちゃんの乳首、  
僕が舐める度に膨らんでてる。。。えっちだ

ちゅぱ

ちゅぱ

「はあっ！ あっ！ あんっ！」

君のおちんち〇気持ちいい！ 奥に当たって気持ちいい！」

「ま、また一緒にイこうねー」

「はあはあっ、お、お姉ちゃんの奥の柔らかいところに僕の先っぽが当たる度に  
お姉ちゃんのアソコがきゅつてなる。。。 気持ちよすぎてもう白いの出ちゃいそう。。。」

はま

ちゅぱ



「ああーー！出るーー！」

せわ

「あーーーはあーーー」

すま

ちゅぱ

お姉ちゃんの赤ちゃんの部屋にうりぱり出しちゃ  
君の濃いザーロンでうりぱり出しちゃ



私のエッチな体を覚えてしまったこのコは、  
私とセックストしたいがために昼夜問わずお店に来るようになってしまった。  
今日はこれで3回目。

『。。。お姉ちゃん、ごめんなさい。。。』

『じょうがないなあ、はやく出さんだよ?  
お店に戻らないといけないから。。。』

『あつ、んつー』

はま

せき

『。。。うん、でも一回出すだけじゃ足りないかも。。。  
なんかね、この頃お姉ちゃんの事考えるだけでおちんち○がどんどん大きくなつて苦しいんだ。  
自分じゃどうしようもないんだ。  
しかも今まで一回出すだけでおちんち○が小さくなつていたんだけど。。。  
もうそれだけじゃダメみたい。。。』

『うふふ』お姉ちゃんがめちゃくちゃになるまでしないと気が済まない

『。。。うん。』

「はあっ、すこやー。あつー奥まで当たつてるー』

『はあはあ、お姉ちゃんのアンコ気持ちいい。あつたから、ぬるぬるしてさ。』

『ま  
ま』

『セ  
セ』

『お、お姉ちゃん今日はもう三回目だから少し疲れできたみたい。。。君の気持ちは分かるけど優しくしてね。。。あんつ!!』

『うめんなさい。。。頭では分かつてんんだけど、

お姉ちゃんの体エッチで気持ちいいから腰が勝手に動いちゃう。。。』

『。

「はあ、すじゅーあつー奥まで当たってるー」

「ははは、お姉ちゃんのアソコ気持ちいい。あたかくて、ぬるぬるして。」

「お、お姉ちゃん今日はもう二回目だから少し疲れてきたみたい。君の気持ちは分かるけど優しくしてね。あんつ！」

「うめんなさい。。。頭では分かつてんだけど、お姉ちゃんの体エッチで気持ちいいから腰が勝手に動いちゃう。。。」

さすがに本日3回目となると、正気を保つだけで精一杯だった。だって何回も子宮の入り口の一番気持ちいい所を的確に突いてくるし、私の腰はこのコのおちんち○が大好きだから私の意志とは関係なく締め付けを始めるんだもの。

「お姉ちゃんのその顔好き。

お店にいる時は綺麗でかっこいいお姉ちゃんが、

今は僕のおちんち〇で気持ちよくなつて泣きそうになつていてるんだもん。」

私は子宮を突かれるたびに体中に走る快感のせいで、

このコの問いかけに相槌を打つことしかできなくなつていた。

あい

あい

はま

せん

気持ちいいかな?ねえ?どうア?

「ねえお姉ちゃん、僕も姉ちゃんを喜ばせるためにたくさん勉強したんだ。

みだり  
みだり

みだり  
みだり



あつーあんつー』

「ううう！ お姉ちゃんの中にまた出すね！」

もう完全に主導権を失った私はされるがまま。  
お店の裏の倉庫で、恥ずかしい格好のまま何度もこのコにハメられまくる。

「はあはあ、お姉ちゃんの体は僕よりも何倍も大きいし  
格闘技やつてるだけあって力もあってすごく強いけど、  
今は僕に逆らえないただの女人の人♪

「あー、はー、あんつー、ショクチ○ボスー、い！ 気持ちいいつー！」  
もっと気持ちよくしてあげるからね♪  
僕のおちんち○無じじや生きられないぐうぐう



「はあ、あつ！ 君のおちんち〇が奥まで当たって気持ちいい！」

気持ちいいーー

「僕がお姉ちゃんの中に一番柔らかい所を突く度に、  
お姉ちゃんがエツチな声あげて涙ぐむのかわいい♪  
。。。はあは、もつとめちゃくちゃにしなが！」



「はあ、あつー君のおちんち〇が奥まで当たって気持ちいい！」  
気持ちいいーー



「僕がお姉ちゃんの中に一番柔らかい所を突く度に、  
お姉ちゃんがエツチな声あげて涙ぐむのかわいい♪」

。。はあはあ、もつとめちゃくちゃにしたら♪』

このコに何度も奥まで突かれる度に、ショタとは言えどやはり女は男には勝てないと感じる。  
。。。だってこんな小さなコに何回も何度もイカされるんだもん♪



「お姉ちゃん出すね！」

うん。。。お姉ちゃんの中にわくばる出してー

れぐら  
れぐら

アコ  
アコ

ああ

あい

セト  
セト

ビ  
ビ